

良き夜と書いて「良夜(りょうや)」と読む俳句の季語きごがあります。これは、秋の満月の夜のことをいいます。

鈴虫の声が響く空間に、青くやさしい光が満ち、えもいわれぬ情じょうぢょ緒ただよが漂う夜です。満月のまんまるの形は、私たちを穏おだやかな心持ちに導いてくれます。

しかし、満月は、いつまでもそのままではありません。月は、刻こっこく々と姿を変えます。漆黒しっこくの新月から、三日月じょうげん、上弦おだの月、満月へと自らの姿を変え、そしてまた満月から、十六夜いざよい、下弦かげんの月、晦つごもりへと、再び漆黒の闇夜へ帰っていきます。

それはまるで、私たちの生きる道みちすじ筋をあらわしているかのようです。

生まれ、成長し、人生を謳歌おうかし、やがて老い、病んで、死んでいく・・・私たちのいのちの歩みを、月は夜空に描えがいているといえるでしょう。

老い、病み、死んでいく・・・人の苦しみからの解脱げだつを説いたお釈迦さまが、さとりを開かれたのが、満月の夜のことであったといわれます。象徴的なことではないでしょうか。

生まれ、老い、病み、死んでいくという、生老病死しょうろうびょうしは、私たちのいのちの事実です。それを避けるのではなく、受け容れ、いのちのはたらきのままに生きることを、お釈迦さまは示されたのです。

泣いてもわめいても、私たちのいのちは、刻々と変わり続けるのです。私たちは、その変わり続けるいのちを生きていくしかないのです。

そうであるならば、それを嘆なげくより、生老病死しょうろうびょうしの事実を受け容れ、安らかな心持ちで日々を過ごし、むしろ“豊かに”変わり続ける生き方を目指したいものです。

月は、姿を変えていきますが、それを少しも悲しむことなく、いつも同じ明るさで、私たちを照らしています。

私たちも月のように、形を変えても悲しむことなく、生老病死しょうろうびょうしを受け容れ、いつも同じ明るさで周囲を照らす存在でありたいですね。

秋の夜、空を見上げてみましょう。

きっと満月が、青くやさしい光で、あなたを包むに違いありません。